移住・空き家利活用
インタビュー集

れんめんと、ゆりはま





れんめんと続く、この町の暮らし

海と山に臨み、東郷湖を抱く湯梨浜町（ゆりはまちょう）。
ふたつの温泉と、広がる梨畑。
夏は青く清々しく、
冬には力強く波打つ日本海。
風土に寄り添いながら
連綿（れんめん）と続いてきた暮らしが、
ここにはあります。

そして、その暮らしを守る家々の多くも、
連綿と受け継がれてきたもの。
この町に惹かれて移住した人の中にも、
空き家になっていた住まいを引き継ぎ、
生活の場とする世帯が増えてきました。

新たな役目を得た家と、そこに住まう人々。
穏やかに繰り返す波のように、
その暮らしは続いていきます。

目次

移住・空き家利活用インタビュー

P4　01 出口雅也さん・圭子さん
P8　02 安藤翔馬さん
P12　03 三宅優子さん・柴田修兵さん
P16　04 酒井千里さん
P20　05 渡邉美幸さん

フォトガイド

P24　暮らしと共にあるゆりはまの景色

移住・空き家利活用情報

P26　エリアガイド
P28　移住・空き家利活用支援制度
P30　アクセス・相談窓口





01　出口雅也 さん・圭子 さん

移住歴｜雅也さん6年、圭子さん7年

湯梨浜で出会い、家族になって

東郷湖ほとりの公園から、集落の中へと続く細い道を入る。少し歩くと見えるのは、昔ながらの一軒家。温かな明かりがこぼれる、出口雅也さん、圭子さんの住まいだ。玄関に入ると目に飛び込んできたのは、15畳はあろうかという広い土間。和室2間を解体し、友人や近所の人に協力してもらいながらDIYで仕上げた空間だ。DIYとはいうものの、雅也さんの職業は左官職人。三和土や土壁の仕上がりには、プロの技が光る。「まだ途中」という壁さえ、独特の趣が美しい。他の部屋の改修も、柱や建具は専門業者に依頼し、壁や床はできる限り自身で施工した。左官の技術を生かして雅也さんが近年始めたのは、土製の塑像〈土塊〉の制作。土間は現在その工房となっており、中央の薪ストーブをぐるりと囲んで、道具類や参考書籍、土塊の作品などが並ぶ。





湯梨浜町に移住したのは、圭子さんが2018年。この町で出会った二人は2019年春に結婚し、翌年に長男の暖くん、翌2021年に長女わこちゃんを授かった。

移住する以前は、東京で福祉関連の仕事をしていた圭子さん。「住んだことのない地域に引っ越してみたくて。旅をしながら移住場所を探し、いいなと思ったのがこのエリアだったんです。ずっと太平洋側に住んでいたので、日本海側の曇り空や雪に魅力を感じました」と、湯梨浜を選んだ理由を教えてくれた。曇天や積雪は、生活の大変さと隣り合わせ。それでも楽しいと、圭子さんは笑顔だ。

「だからこそ、晴天の喜びが増すというか。冬は雪遊びもできますし、夏は海遊び、川遊びを思い切り楽しむぞと、メリハリができたのも良いです。夏の日本海があんなに澄んでいることも、移住して初めて知りました」











移住を決め、ゲストハウス〈たみ〉のヘルパーとして、住み込みで働き始めた圭子さん。一人暮らし用の物件を探していたところ、併設のカフェの常連さんが、羽合にある空き家の所有者さんを紹介してくれた。

「空き家になって12年とのことで、内見のときは埃がいっぱい。でも、残っていた荷物を大家さんが片付けてくださったので、お借りして、自分で掃除をして住み始めました。まずはここで、〝理想の田舎暮らし〟を叶えようと思って」

雅也さんと知り合ったのは、移住して1年が経った頃。実は雅也さん、圭子さんがたみで働き始める少し前に、入れ違いでヘルパーとして働いていた。

「以前は首都圏に住んでいましたが、日本中を旅した経験から、人が多すぎない場所の方が生活しやすそうだと感じ、移住を考え始めました。住むなら友人ができそうな場所というのも重要でしたね。湯梨浜を訪れた最初のきっかけは、書店〈汽水空港〉。店主のモリくんにいろんな情報を教えてもらって、その後も何度か湯梨浜を訪れました」

移住への思いが固まり、試しに2ヶ月、たみのヘルパーとして松崎に滞在。その後、資金を貯めるために1年間、東京へ戻る。「実際はあまり貯まりませんでしたけど」と苦笑する雅也さんだが、それでも湯梨浜の友人に住まいと現在の職場を紹介してもらい、移住を果たした。





新たに塗った土壁と新建材の下に眠っていた元の壁が、調和しつつ混在。二間続きだった2階は壁を増設し、2部屋に改修。風呂場前にも壁を立ち上げ、脱衣スペースを作った。

交際を始めてまもなく、二人は圭子さん宅で同棲し、結婚。わこちゃんの妊娠を機に新居探しを始め、友人の紹介で出会ったのが現在の家だった。物件に求めていたのは、十分な広さ、予算内の価格、自分たちで改修して住める状態。加えて松崎への近さも、二人にとっては重要だった。

「たみで働いていると、ご近所の方と知り合う機会がとても多くて。私はそうやって地域の方と関わり合いながら暮らしていきたい。それなら、この辺りに引っ越したいなと思ったんです」と圭子さん。「この集落に妻の友人がいたことも心強かったです。引越しの挨拶回りにも同行してくれて、今も何かとお世話になっていますね」と雅也さんが続ける。

そういえば、圭子さんの描く〝理想の田舎暮らし〟とは、どんなものだろう？　あらためて聞いてみると、「野菜や梅干しなどの食べ物、器などの生活道具を自分で作ること。集落のご近所付き合いを楽しむこと。それから、そういった環境で子どもを育てること。わこの出産直後には、友人や地域の方が代わる代わる手伝いに来てくれて、本当にありがたかったです」との答えが。友人や地域の人に見守られ、のびのびと成長する子どもたち。「人との繋がりを大事にできる子に育ってほしい」と圭子さん。雅也さんは穏やかに頷き、こう話してくれた。

「僕が子どもの頃は、学校を卒業してから自分がどう生きていくか、よく分からなかったんです。大学に行かせてもらって、就職活動をして会社に入る。その選択肢しか想像できなかった。でも、ここにはさまざまな人が身近にいるから、いろんな生き方があることを早いうちから知って、自分でどうしたいかを考えて、生きてくれたらいいですね」

日が暮れて、みんなで食卓を囲む。だんらんする四人の姿は、温かい明かりに包まれていた。この町で生まれた家族の時間は、これからも日々、紡がれていく。





02　安藤翔馬 さん

移住歴｜4年（県内移住歴 6年）

梨の木と共に、この地で生きる拠点

根を張っている。あるいは、腹が据わっている。なりわいである梨栽培の話をするとき、穏やかな表情と語り口の奥に自然体の覚悟が垣間見えて、どきりとした。梨農家、安藤翔馬さん。新規就農して5年目、その眼差しはすでに、梨と向き合うこの先の数十年に向けられていた。

安藤さんは、いわゆる孫ターン。東京生まれ東京育ちだが、両親が湯梨浜町と倉吉市の出身で、幼い頃からよく同地域を訪れていた。「毎年夏になると、梨農家をしていた母方の祖父が二十世紀梨を送ってくれました。物心ついた頃から、二十世紀梨は身近な存在でしたね」

湯梨浜に来たのは、梨作りのため。移住の理由を尋ねると、安藤さんはてらいなく、そう答えてくれた。

「梨農家になる選択肢を意識し始めたのは、学生の頃。大学時代の4年間は毎年欠かさず夏に帰省し、祖父の梨畑で収穫を手伝っていました。その畑も祖父の代で最後になると聞き、もったいないなという気持ちをずっと抱いていたんです」





梨の木は収穫を繰り返しながら、何十年とかけて育てていくもの。それでも近年、後継者不足から放棄せざるを得ない梨畑も少なくはない。思いを胸に秘めつつも、安藤さんは大学卒業後、新卒で就職。人生も収入も安定するはずの勤務先だが、「勤めてみたことで、やはり梨農家の道に進みたいという気持ちが強くなった」と語る。

「二十世紀梨を残していきたいという思いが、まずありました。１００年以上続く品種で、流行に左右されない別格の存在なんです。手に職というか、自分の技術で食べていく仕事への憧れもありました。偶然、自分には梨作りが身近にあり、後継者不足が問題になっている。それならやってみようと思ったんです」

湯梨浜に通いながら就農へと動き出した安藤さんは、社会人3年目の途中で退職。2018年5月、倉吉にUターン移住していた両親宅に居を移し、農業大学校で研修の日々を送る。翌年はいくつかの畑で梨作りに従事し、3年目に晴れて独立。自身の名前での梨栽培をスタートさせた。お祖父様も喜んだのでは？と聞いてみると、「どうなんでしょうね」と一言。笑みを浮かべつつ、こう続ける。

「最初は心配していたと思います。不確定なことが多いまま、相談もせず来たので。それでも今は、自分の梨農家としての数年を見て、本気でやりたいんだと理解してくれているのかな。周りの人には、『誰に似たんだか、よう仕事しとる』と言ってくれているみたいです」

梨栽培を本格的に始めた安藤さんは、より畑に近い場所に暮らすべく、知人に松崎の借家を紹介してもらい、ついに湯梨浜の住民に。「住むのにちょうどいい家」だった借家に住みつつも、より広い物件を求め、2023年夏、羽合に空き家を購入した。

物件は築50年弱の8DK。広い玄関に趣向を凝らした床の間、茶室も備えた、重厚な日本家屋だ。家中に並ぶ調度品の物量には圧倒されたが、片付けさえすれば住める状態。眺望も良く、温泉を引くことも可能だった。

「農機具も置ける自分の拠点が必要だと思うようになり、物件を探していました。この家は町内の不動産会社のホームページで見つけたんです。内見してみると状態も良く、広さや立地、金額も希望にかなっていたので、すぐに購入を決めました。改修はキッチンと浴室周りが中心。設計士をしている東京の同級生が、湯梨浜まで来て図面を制作してくれたんですよ」

補助金の申請や残置物の片付け、改修を経て、安藤さんは2024年3月からこの家での生活をスタート。新たな拠点で、農家民泊事業も開始する。そこには二つの思いもあった。









遠方に住む前所有者さんとは契約時が初対面。先代もその方も農業関係者で、縁を喜び、今年は二十世紀梨の注文も。農にまつわる繋がりも含めて「いい家に巡り会えました」



「一つには、梨作りの現場を多くの人に知ってほしい。もう一つには、特に若い人たちに、畑に立ち、自然豊かな景色に囲まれ、何かを体験する機会を提供したい。住む場所も仕事も、いろんな選択肢があっていいんですよね。ここでの経験が、少しでもそれを知るきっかけになればと思います。湯梨浜はのどかですが適度に賑やかで、面白いお店もあり、移住にちょうどいい町。滞在を通して、この町に関わりたいと思ってもらえたら嬉しいです」

現在、安藤さんが梨を育てているのは、祖父から継いだ梨畑と、野花（のきよう）にある梨畑、松崎駅近くの梨団地。日当たりや土壌、木の具合も違う畑と向き合いながら、作業に勤しんでいる。農作業中は山にいることが多いが、仕事終わりに羽合の海で眺める夕景や、石脇海岸で楽しむサーフィンが、いいリフレッシュになっているそうだ。

「農業は大変さも含めて、楽しんでやっています。自分で選んで続けている仕事ですから。梨の木との付き合いは、これから数十年続いていくもの。梨農家である限り、湯梨浜はこれからも住み続けていく場所です」

そう語る安藤さんの言葉には、よどみがない。夕暮れの梨畑に立つ姿はすでに、「都会から来た若者」ではなく、この地に根をおろした「梨農家」だった。









03　三宅優子 さん・柴田修兵 さん

移住歴｜3年





風景と、人との関わりに案内されて

東郷湖を望む丘にたたずむ、旧桜小学校の校舎。ミニシアター〈jig theater（ジグ シアター）〉は、その旧校舎を利用した町の施設、さくら工芸品工房の3階にある。２０２１年7月の開館以来、月に数日のみオープンし、1作品あるいは1監督の作品数本のみを上映。誠実にセレクトした、観る人に「戸惑いを案内する」かのような新旧の作品を紹介しており、県内はもちろん、近県や関西から足を運ぶ観客も少なくない。

同シアターを運営するのは、三宅優子さん、柴田修兵さんご夫妻。２０２１年、息子の相（たすく）くんと共に、大阪から湯梨浜町へ移住した。二人は２０２３年夏、長く空き家になっていた古民家を購入。離れに仮住まいしながら、母屋の改修工事を続けている。一部の壁や窓、電気関連の工事は、職人や技師の友人たちに施工や監修を依頼。解体や天井、床、その他の壁などはＤＩＹで改修中だ。「移住を決めてからずっと、仮住まいしている感覚」だと、柴田さんは笑う。



移住を考え始めたのは、6年ほど前。「ずっと自然の多いところで暮らしたかった」と言う三宅さんに対し、大阪での生活が好きで「以前は全然移住したくなかった」と話す柴田さん。湯梨浜暮らしを楽しむ今とのギャップに、思わず笑ってしまった。変化のきっかけは、家族旅行で滞在した離島での生活。それまで目にしていた日常と異なる景色に囲まれ、「今とは違う風景を見ながら暮らしていたい」と感じるようになったそう。相くんが生まれ、三宅さんも「伸びやかに過ごせる環境を見付けたかった」と話す。

住みたい場所を探し、各地を巡り始めた三人は、次第に鳥取県内を移住先として考えるように。湯梨浜は友人がいることもあって度々訪れていたが、「当時は県西部の町に住むつもりで、具体的に話を進めていた」と振り返る。それでも静かに、変化は起こっていたのかもしれない。晴れやかな顔で、柴田さんはこう話す。

「2020年の夏に免許合宿で羽合へ滞在した際、毎日、東郷まで自転車で往復していたんです。そのときの景色がもう、めちゃくちゃ気持ちよかった。たみのスタッフさんと話したり、汽水空港に寄ったりする時間も含めて、この町での生活が楽しくて」

移住先を湯梨浜にした決め手の一つは、そんな柴田さんの様子だったと三宅さん。

「松崎にいるときの夫が、すごく生き生きして見えたんです。水辺があって景色が開けている土地が、彼には合っているのかな。それなら、この町に住もうよと」

2020年11月末、ついに湯梨浜への移住を決めた三人。早速、物件探しと開業準備を始める。

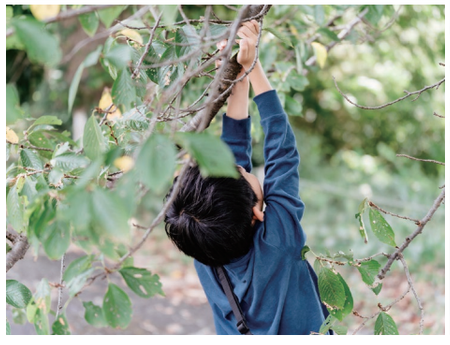
「映画館の構想は移住前からあり、プレイベントとして翌年2月下旬に上映会を企画しました。ただ、住む家が見つからなくて。コロナ禍で休業中のみに仮住まいさせてもらえることになり、2月初めから湯梨浜で暮らし始めました」

それからは映画館の準備と並行し、住まいとなる空き家を探す日々。たみを退去した後は友人宅に1ヶ月ほど居候し、その後、別の友人の紹介で見つけた戸建アパートに入居する。「購入できる家が見つかるまでの仮住まいのつもりでしたが、約3年住みましたね」と三宅さん。2023年、三人はついに、今の家との出会いを果たした。

「物件を紹介してもらい、外観を見にいったんです。一目で、良質な木材で造られた立派な家だと感じました。jig theaterからも近く、庭からの眺めも良くて、いい家だと思いましたね」

所有者さんと何回か会って話をし、内見を経て、無事に購入に至った三宅さんと柴田さん。家屋内の荷物を所有者さんと分担して片付けながら、契約や改修の段取りを進め、2024年4月、離れに転居し、新たな〝仮住まい〟を始めた。









以前に挑戦した小屋（通称・ドリルハウス）の改修がDIYのいい経験に。神社の祭礼や草刈り、盆踊りなど、集落青年部の行事にも参加。地域による自治の大切さを実感している。



湯梨浜に住んで4年目。暮らしてみて実感したこの町の魅力を、二人はこう話す。

「田畑があって農業もでき、海も山もすぐに遊びに行ける距離。スーパーでは新鮮な魚が買えますし、ショップやカフェなど、現代的なカルチャーに触れられる場所も充実しています。映画のついでに立ち寄ってもらえる場所がたくさんあるのって、嬉しいことですね」

この地に住む心地よさについて、三宅さんはさらに、こんな話をしてくれた。

「移住先を探すときって、『そこに何があるか』を考えますよね。でも、『誰がいるか』も大切だと思うんです。ここには、日々すれ違って挨拶を交わすような距離に、気の合う人たちがたくさんいる。知り合いから親しい友人まで、このスケールの町に、人との関わりの幅広いグラデーションがある。それって、すごく豊かだなって」

笑みを浮かべながら、「いい町だなあ」と三宅さんはつぶやく。

jig theaterも4年目に入り、「定着してきた感覚がある」と柴田さん。

「来てくれるお客さんの層に幅と厚みが出てきたと感じています。地域の映画好きの方が通ってくれるのも嬉しいですね。よく知らない映画でも、純粋に楽しんでくださる方も多くて。これはすごいことだと思うんですよ。これから5年、6年と続けた先には、また違う景色が見えてくるのかもしれませんね」

映画には、今まで見知っていた日常が、鑑賞の前後で変わってしまうほどの体験が備わっている。柴田さんはそう話す。

それならば、この町の風景も、1本の映画のような体験になり得るのかもしれない。かつて三人を、この町に案内したように。







04　酒井千里 さん

移住歴｜6年

この家と出会い、戻ってきた海辺の故郷

青い空に水平線、岸には並ぶ白い漁船。潮風を感じる泊港に、その人の姿はあった。着付け講師、エステティシャン、古民家カフェ〈月ようび〉店主と多彩な顔を持つ、酒井千里さん。生まれも育ちも、ここ泊。港の風景を見つめながら成長した、生粋の泊っ子だ。

「今の時季、着物は単（ひとえ）にするものですけど、まだまだ暑いので」

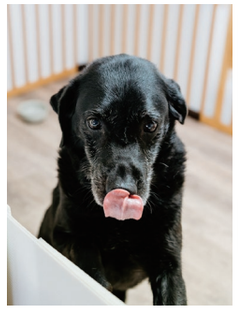
涼しげな小千谷縮（おぢやちぢみ）の着物に身を包み、そう言って笑う酒井さん。

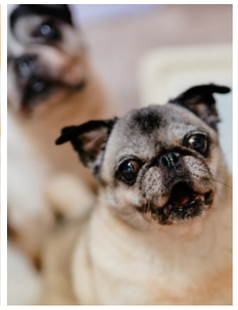




当時暮らしていた千葉県から泊へとUターン移住したのは、２０１８年10月。現在は泊港近くの古民家で、「相方」と呼ぶパートナーの池野信也さんと、３匹の犬たちと共に暮らしている。移住のきっかけは、町の空き家情報バンク（現：空き家・空き地情報バンク）で見つけた現在の住まい。実は酒井さん、湯梨浜町に戻ろうという気持ちは「この家を見るまで、まるっきりなかった！」のだそう。

「移住先を探してはいたんです。そこで何気なく空き家情報バンクをのぞいてみたら、この家の紹介が目に留まって。地元とはいえ物件があるのは、あまり馴染みのなかった地域。とりあえず見てみたいと思い、内見を決めました」











「決めると早い」という酒井さん。すぐに池野さんと帰省し、現地へ。こうして出会った1軒の空き家が、酒井さんの「今」を大きく変えた。

「実際に見せていただいたら、すごく良くて。何となく、『気がいい』と感じたんです。築96、7年と伺いましたが、空き家の期間も手入れをされていたようで、とても綺麗でした。特にときめいたのは、昔ながらのタイルの洗面台。窓からの光も、ほら、素敵でしょう?」

嬉そうに案内してくれる酒井さん。初見で物件を気に入り、なんとその場で購入を決めたそう。当時はまだ「泊でどう暮らすか、何も決めていなかった」という潔さで、翌月には売買や登記の手続き、千葉県のマンションの売却へと動き出す。2017年5月に内見し、2018年夏には改修を終え、同10月には、泊での新生活をスタート。住まいが片付いたところで犬たちの引越しを行い、続いて池野さんの母親を新居に迎えた。

「新居の改修は地元の工務店に依頼しました。1室だけ着付け用に和室を残し、その他は板張りに。それから急な階段を外して、緩やかな階段を新設。大きな改修はそのくらいでしょうか。それでも、それなりの費用がかかりましたね。工務店の方が改修の補助金に詳しくて助かりました」

必要な改修をする一方で、手を加えないことも大切にした。

「古い建具って魅力的ですよね。こうして残っているだけでもすごいことですから、そのまま受け継ぎたくて」

移住を期に、酒井さんは自宅でエステサロンと着付け教室〈キラクール〉を開業。長く飲食業に従事してきたが、新居と出会ったことで、かつて経験した仕事と、取得していた資格を生かすことに決めた。

「間取りを見て、この家ならサロンも教室もできるなと。この町では、何か技術や資格を持っていれば、それを仕事にして生きることもできる。そういった生活が、都会より叶えやすいと思うんです。相方もネイルスクールで技術を学んで、ここでサロン〈ナンバーエイトネイル〉を開いているんですよ」





月ようびの人気メニュー「いちごクリームチーズ」と「酒ノ津仕立てのサバでSABAサンド」。苺は湯梨浜産、酒ノ津のサバは鳥取市気高町の名産。鳥取の食が詰まった逸品。



家ありきで、生き方を選んだ酒井さんたち。2020年9月には、玄関で月曜日のみ営業するカフェ、月ようびをオープンした。看板メニューは、地元産食材を使った種類豊富なベーグルサンド。町外から通うファンも多く、今や知る人ぞ知る泊の名所になっている。

「苺や梨、卵などは町内の農家さんから直接仕入れています。食べることが好きなので、自分が食べたいものを作っているんですよね」と笑顔の酒井さん。泊でカフェを開いたのにはもう一つ、地元を思っての理由もあった。

「月曜日の午前中、以前は隣の家の軒先に、野菜の移動販売が来ていたんです。そこへ集落の人が買いに来て、立ち話をしているのが日常の風景。地域の方にとって、大切なコミュニケーションの場になっていたんですよね。そんなふうに地元の方が気軽に立ち寄って、お茶を飲みながらお喋りできる場があればいいなと思い立ったんです」

その願いもあってか、デイサービス前に注文に寄ったり、顔を見がてら訪れたりする地元の常連客も。「そうやって寄ってもらえることが嬉しい」と、酒井さんは穏やかな表情を浮かべる。

「相方の母も介護が必要でしたので、一緒に暮らすことを提案したんです。以前は一人暮らしでしたが、鳥取ではたくさんの方に関わっていただけて、穏やかに最期を迎えることができました。犬たちも、泊に来てから病気をしなくなったんですよ。潮風を浴びながらの散歩が良かったんですかねえ」

慣れ親しんだ集落の風景は、カフェやサロンのお客さんにも好評だ。

「港沿いを歩くのがリフレッシュになると言っていただけて、すごくありがたいですね。私自身も、海の近いこの土地での生活をすごく気に入っているんです」

故郷との縁を新たな形で結んでくれた、古民家との出会い。そこで日々を送る酒井さんの姿は、潮風のように軽やかだ。



05　渡邉美幸 さん

移住歴｜6 年





思い出も引き継ぎ、叶えた理想の暮らし

ゆらぐ湖面を見つめる、静かな朝のひととき。東郷湖のほど近く、松崎の町に暮らして7年目を迎えた渡邉美幸さんが、大切にしている時間だ。

「朝、仕事の前に東郷湖まで散歩して、しばらく水面を眺めて過ごすんですよ。日によって水の動きが違うから、見るたびに感動します」

2ヶ月前に引っ越したばかりの渡邉さん。その住まいは、昭和後期に建てられた和洋折衷の平屋。小上がりや縁側のある、個性的で愛らしい3DKだ。

「細かい造作に、こだわりを感じる家です。住まれていた方は、そうして生活を楽しんでおられたのかなと想像が膨らみますね。こちらの柱には、背丈を測った跡が。所有者さんの親戚の方が一人住まいされていたと伺いましたが、親族の子が遊びに来ていたのかな」

嬉しそうに、お気に入りの意匠を教えてくれる渡邉さん。かつてここに流れていた時間と、住人の人柄に思いを馳せつつ、自らの新生活を味わっている。





渡邉さんの出身は、鳥取県米子市。高校を卒業して関西の学校に進学した後、再び米子へと戻った。移住前は不動産会社に勤め、宅地建物取引士の資格も持っている〝物件好き〟。当時は比較的新しい物件を扱っていたが、自身は「古い一軒家が好き」と話す。米子から湯梨浜へは車で1時間ほどと、通えない距離ではないが、渡邉さんは移住を選んだ。

「ずっとたみに泊まってみたかったのですが、米子と近すぎて、きっかけをつかめなくて。そんな中、ちょうど仕事を辞めた時期にたみのシェアハウスの住人募集を見つけて、『今なら住める』と思い、申し込みました」

それが2018年9月のこと。実際に暮らしてみると、大きな発見があった。

「同じ鳥取でも、随分違うんだなと。東郷湖があるおかげか、この辺りは散歩している方が多いですよね。目的もなく散歩をしたり、景色を眺めたり、私はこういう生活をしたかったんだと気付いたんです。ここは自分の暮らしの理想が詰まっている町。だから、こんなに居心地がいいんでしょうね」

同年11月、渡邉さんはたみのスタッフとなり、働き始める。当時のたみは連日、旅人や住人、地域の人、移住者などが行き交う賑やかな場所。「毎日、何かしらのイベントが起こっていました。楽しかったですね」と振り返る。

再び転機が訪れたのは、約1年後。友人の住んでいた借家が空くと聞き、一人暮らしをすることに。

「ちょうど住める家があるなら、また一人で生活してみようと思って。寂しくなると思いましたが、静かに過ごせて、予想以上に快適でした。水回りも共同ではないので、好きなタイミングで使えることに最初は戸惑ったくらい。隣に友人一家が住んでいたのも、心強かったです」







この家で渡邉さんは、小さな相棒、猫の天を迎える。ずっと飼いたかった猫を「今なら飼える」と思っていたところ、友人から子猫を保護したとの連絡をもらい、引き取ることに。移住、仕事、引っ越し、猫との暮らしと、渡りに船のタイミングに乗ってきた渡邉さん。2022年に転職し、生活が落ち着いてきた2023年末、新たな船がやってきた。

「町の空き家・空き地情報バンクで、この家の物件情報を見つけたんです。近所に住んでいたので、実は以前からこの物件が気になっていて。早速、地域おこし協力隊の空き家担当の友人に連絡し、内見に必要な書類や手続きを教えてもらいました」

その時点で、きっと心は決まっていた。渡邉さんは、内見での印象をこう話す。

「違和感がなかったというか。この家で生活している自分が、すっとイメージできたんです。所有者さんがこの家を大切にされていることも、お話や部屋の様子から伝わってきました。きっと素敵な思い出がたくさんあるんだろうなと」





人との距離感のちょうど良さも松崎の魅力。ご近所の方から野菜をもらったり、夕飯をご馳走になることも。室内には元あった家具と渡邉さんの家具とが、馴染んだ様子で並ぶ。



スムーズにやり取りは進み、売買契約も完了。補助金を活用して必要な修繕や工事を終え、今年7月末、無事に引っ越しを終えた。

1年前には想像もしていなかった、大きな変化。それでも、「この地域にすでに住んでいて、友人知人もいましたから。数年かけて、ここに至る大きな準備をしていたのかもしれませんね」と渡邉さん。「散歩のできる環境で、猫と一緒に、自然を感じながら古い平屋で暮らす。気付けば理想の生活が叶っていました」と笑みがこぼれる。聞けば、課題だった駐車場探しも、意外な形で解決したそうだ。

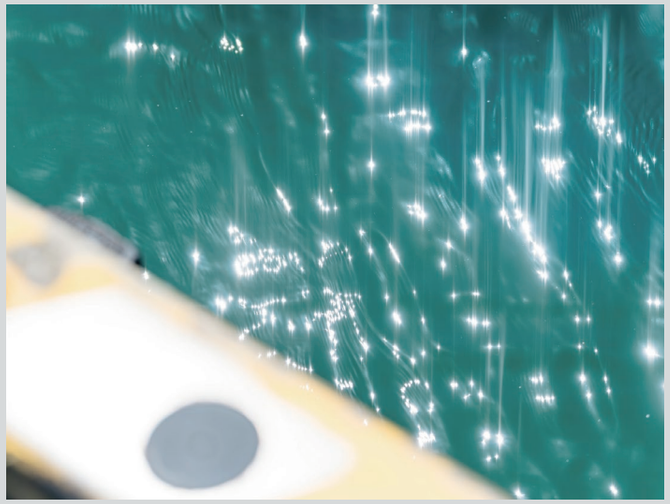
「ご近所の方が野菜を持って訪ねてこられて。元の住人の方もご存知で、『駐車場が必要なら借りませんか?』と声をかけてくださったんです。畳替えをお願いした近所の畳屋さんも、昔この家の仕事をしたことがあるとおっしゃっていました。住んでいた方とこの家に、ご縁を繋げてもらっているような、見守られているような気持ちがしています」

取材を終える頃、小雨まじりの空模様から、晴れ間がのぞき始めた。光が差し、室内に映し出された陰影に思わず見とれる。

「窓に映る庭木の影を眺めながら、のんびり家で過ごすのが好きなんです。この暮らしをこれからも続けていきたいですね」

新しい日常の穏やかな波間へと、渡邉さんと天の乗った船は、ゆるやかに漕ぎ出したばかりだ。







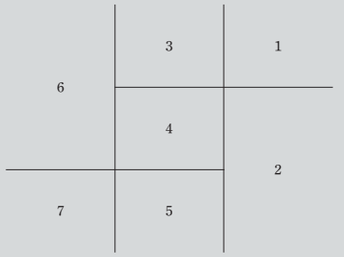






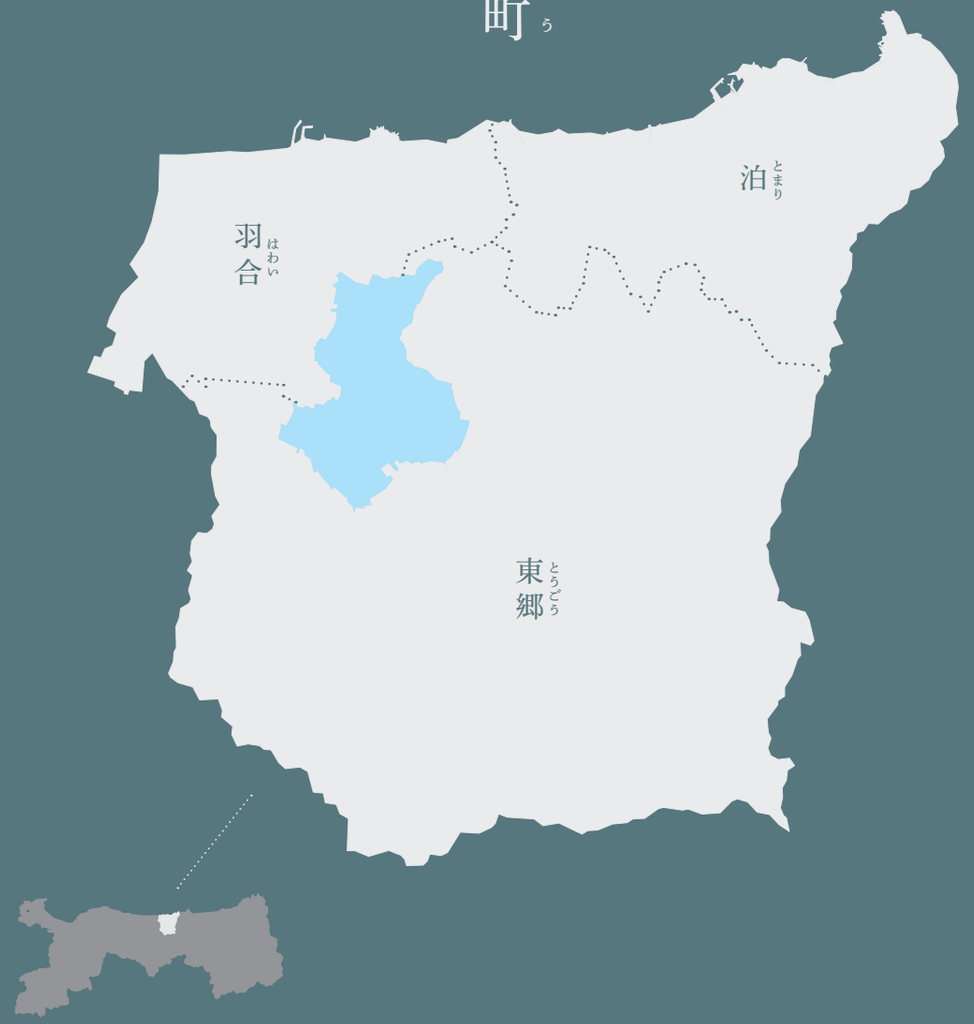


暮らしと共にある
ゆりはまの景色



1.東郷湖に佇む四手網の周辺。景色に惹かれ、自然と人が集まる。 / 2.野花の山からの眺め。湖の中程にはわい温泉、その先に日本海も望める。 / 3.晴天を映した日本海は、湯梨浜ブルーと呼びたくなる深い青色。 / 4.家々が軒を並べる、泊港への路地。受け継がれてきた趣ある風景。 / 5.羽合に広がる田園。四季ごとの美しさと、空の広さを感じられる場所。 / 6.梨畑から見上げる黄昏空。一日の終わりの祝福のような時間。 / 7.町内8箇所にある足湯は、人々の憩いの場。日常の中の贅沢。

湯梨浜町（ゆりはまちょう）



鳥取県のほぼ中央に位置する、人口約16000人の町。2004年に旧東郷町、泊村、羽合町が合併して誕生しました。県中部の中心地である倉吉市まで約5kmと、市街地にもアクセスしやすい立地です。町名は名所・名産の「温泉、梨、砂浜」に由来。夕日の美しい東郷湖、湖畔に湧く二つの温泉、雄大な日本海、緑豊かな山々に恵まれ、四季を通じて美しい景色に出会えます。鳥取県の名産品である二十世紀梨の代表的な産地で、イチゴやマスカット、野花豊後（梅）の栽培もさかん。恵まれた自然環境を生かし、ウォーキングやカヌー、グラウンド・ゴルフ、SUP、サーフィンなどのアクティビティも充実しています。

東郷　Togo

町の南側エリア。松崎駅、東郷温泉、倭文神社、燕趙園などがあります。昔ながらの町並みの残る駅周辺には、ゲストハウスや独立系書店、カフェ、ミニシアターなどが点在し、現代的なカルチャースポットとなっています。









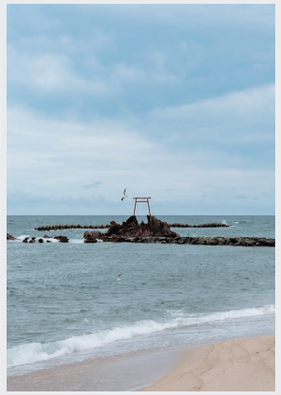
泊　Tomari

町の北東側、海沿いを中心とするエリア。グラウンド・ゴルフ発祥の地。泊漁港、潮風の丘とまり、石脇海岸などがあります。サーフィンの名所となりつつある石脇海岸には、いい波を求め、関西をはじめ他県からも多くの人が訪れます。

羽合　Hawai

町の北西側エリア。はわい温泉、ハワイ海水浴場などがあります。スーパーや各種チェーン店が近く、買い物に便利。毎年、町の姉妹都市ハワイ州ハワイ郡からアーティストを招き、ハワイアンフェスティバルを開催しています。



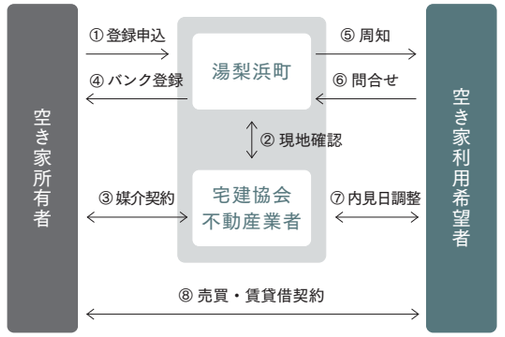


空き家利活用＆移住・定住促進支援制度

空き家・空き地情報バンク制度

空き家・空き地を「売りたい人・貸したい人」と「買いたい人・貸したい人」とのマッチングを行う町運営の制度です。湯梨浜町は鳥取県宅地建物取引業協会（宅建協会）と提携しており、内見および契約締結は、町が宅建協会を通じて選定した媒介契約締結業者（不動産業者）の仲介により行われます。

問い合わせ先：
湯梨浜町 デジタル・みらい戦略課
TEL｜0858-35-3141



空き家所有者（売りたい人・貸したい人）

1. 登録申し込み
空き家等登録申込書を町デジタル・みらい戦略課へ提出。

↓

2. 現地確認
町と宅建協会の相談員による現地確認。登録可能物件であれば、町が宅建協会に媒介契約締結候補業者の選定を依頼。

↓

3. 媒介契約の締結
選定された媒介契約締結業者と所有者とで、媒介契約を締結。

↓

4. 登録と周知
町が空き家・空き地情報バンクへ登録し、町ホームページなどで紹介。

↓

5. 内見希望の受付
利用希望者からの問い合わせがあれば、町が媒介契約締結業者に連絡。利用希望者と媒介契約締結業者で内見日を調整。

↓

6. 売買・賃貸借契約
媒介契約締結業者の仲介により、利用希望者と所有者間で契約締結。

空き家利用希望者（買いたい人・借りたい人）

1. 利用申し込み
利用希望者登録申込書と同意書を町デジタル・みらい戦略課へ提出。

↓

2. 登録
利用希望者として町が登録。

↓

3. 利用希望の問い合わせ
希望の物件があれば、町に問い合わせ。町が媒介契約締結業者を紹介。

↓

4. 内見日の調整
媒介契約締結業者と利用希望者で内見日を調整。

↓

5. 売買・賃貸借契約
媒介契約締結業者の仲介により、利用希望者と所有者間で契約締結。

移住定住・空き家利活用関連補助金

湯梨浜町では、移住、住宅取得、空き家利活用に関する補助制度を通して、移住定住や空き家利活用を支援しています。補助金の利用には条件があります。工事に着手する前、住宅を購入する前にご相談ください。その他の補助制度や各補助金の詳細については、湯梨浜町デジタル・みらい戦略課までお問い合わせください。

問い合わせ先：
湯梨浜町 デジタル・みらい戦略課
TEL｜0858-35-3141

補助金一覧ページ

空き家利活用
流通促進事業補助金

空き家を所有、賃借、購入する町内在住者（町内移住予定の人を含む）が、空き家を利活用する場合にその費用の一部を助成します。

移住定住者中古住宅
修繕支援事業補助金

中古住宅を購入し県外から移住してきた人、または県外から移住してきた後に中古住宅を購入した人に対して、その中古住宅の修繕費用の一部を助成します。

移住定住者住宅
支援事業補助金

県外からの移住予定者および県外から移住し6ヶ月以内の人が、住宅を新築、購入、増改築またはリフォームする費用の一部を助成します。

住宅等取得
仲介手数料補助金

住宅の購入や住宅用地の取得時に要した仲介手数料の一部を助成します。

空き家家財道具等
処分費支援事業補助金

空き家・空き地情報バンクに物件を登録している空き家所有者や入居者に対して、家財道具等の処分費の一部を助成します。

移住定住者
家賃助成事業補助金

県外から移住し6ヶ月以内の人に対して、家賃の一部を1年間助成します。

移住者運転免許
取得支援事業補助金

県外から移住し6ヶ月以内の人に対して、自動車運転免許取得費用の一部を助成します。

移住者運転
安心支援事業補助金

県外から移住し6ヶ月以内の人に対して、ペーパードライバー講習受講費用の一部を助成します。

三世代同居世帯等
支援事業補助金

新たに三世代同居を始める世帯に対して、住宅を新築、購入、増改築又はリフォームする費用の一部を補助します。

多世代同居住宅整備
支援事業補助金

高齢者世帯が居住する住宅に若者世帯が新たに同居（住み継ぎリレー）するための改修等を行う人に対して、改修、設計、家財道具処分等にかかる費用の一部を補助します。



問い合わせ先
湯梨浜町デジタル・みらい戦略課

〒682-0723
鳥取県東伯郡湯梨浜町久留19-1
TEL｜0858-35-3141
HP｜https://www.yurihama.jp
E-mail｜ymirai@yurihama.jp

れんめんと、ゆりはま
── 移住・空き家利活用インタビュー集

発行日
令和6年10月
令和8年10月（第二版）

発行
湯梨浜町デジタル・みらい戦略課

制作
編集・取材・文｜林雅子
写真｜村上伸明
デザイン・編集補助｜加藤咲

本誌掲載の情報は取材（2024年9月）または改訂時点のものです。
内容が変更になっている場合もありますので、あらかじめご了承ください。

アクセス

東京

飛行機
羽田空港 → 鳥取砂丘コナン空港（約1時間10分）→ 湯梨浜（車：約40分 / 連絡バス：倉吉行 松崎駅前下車）
羽田空港 → 米子鬼太郎空港（約1時間20分）→ 湯梨浜（車：約80分）

大阪

高速バス（※神戸（三宮）発着便あり）
大阪駅 → 松崎駅（約3時間50分）
大阪駅 → 倉吉駅（約4時間）→ 湯梨浜（JR・路線バスなど：10分）

JR
大阪駅[JR特急スーパーはくと] → 倉吉駅（約3時間）→ 山陰本線 松崎駅（約6分）

自動車
中国自動車道 → 鳥取自動車道 → 山陰自動車道（約3時間）

岡山

高速バス
岡山駅 → 倉吉駅（約2時間40分）

JR
岡山駅[JR特急スーパーいなば] → 鳥取駅 → 山陰本線 松崎駅（約2時間50分）
岡山駅[JR特急やくも] → 米子駅 → 山陰本線 松崎駅（約3時間50分）

自動車
山陽自動車道 → 岡山自動車道 → R313 → R482 → R179（約2時間20分）

広島

高速バス
広島駅 → 倉吉駅（約4時間30分）

自動車
中国自動車道 → 松江自動車道 → 山陰自動車道（約3時間40分）

相談窓口

湯梨浜町デジタル・みらい戦略課 みらい創造係

移住定住や空き家・空き地情報バンクと、関連する補助金の担当課です。空き家利活用や移住定住のサポートを行っています。
TEL｜0858-35-3141

湯梨浜まちづくり株式会社

お試し住宅の運営、移住コーディネーターによる移住サポート、総合相談センターどれみの運営などを行っています。
TEL｜0858-48-6210

総合相談センターどれみ

松崎駅前にあるコミュニティスペースです。移住相談や観光案内、空き家相談を随時受け付けています。
TEL｜0858-32-0801

YURIHAMA, TOTTORI